

## グループワーク と パターンリズム

たなべ・ひでのり

### 1. ある発端 —— ニュージーランドの保育園

昨年11月上旬わたしたち研究者一行5名は、ニュージーランドを旅していた。研究施設・老人福祉施設など視察する傍ら、一ヶ所だけ保育園を訪れた。大都市オークランド市内のことである。

広くもない園庭に砂場とシーソーがぼつんと一基、園舎内は見学者が入りこみにくいほど狭い。わが国のむしろデラックスとさえ思える施設を見馴れた目には、設備のハード面は貧弱に見える。しかし、大事なのは中味、保育のソフト面であろう。しかしそれも、われわれの場合とは大きく違っていた。

一口に言って子供たちは、放任されているように見える。場所が狭いせいもあって、それは大袈裟に見ればごったがえしのカオスだ。事実、説明してくれたその主任保育母に当る人の話でも、遊びの場合も大まかな指導はしても、子供たちの自主性にまかせているとのことだった。

それはわれわれの場合の、幼稚園での教育、保育園の養護と教育、それぞれの現場では考えられないほどの放任ぶりである。

「これでいいのですか？ どう思います、この自由放任ぶり」と、同行の1人・教育現場の経験が深いS女史が、その夕方もたれた宿舎での研究チーム・ミーティングで、かなり意気こんで問題提起をした。

その言葉に刺戟されて、われわれは春景色の南半球で冬のさ中にある母国の、幼児教育にあらためて思いをはせる。“保育の道は果てないけれど”などの歌詞にもあるように、保育者は日々忙しく身を粉にして動きまわっている。

6領域（健康・社会・言語・自然・音楽・造形）のすべての分野に励み、

限られたスタッフでクラスを掌握しカリキュラムを消化する。保育所の8時間、幼稚園の4時間は、ひたすら多忙の中に過ぎてしまう。

※ 例えば保育所の場合、厚生省の定める（最低）基準は、児童対保育母の数にして、未満児（0，1，2才）6：1，3才児20：1，以上児（3才以上，つまり4，5才児）30：1と定められ多年変化がない。ただし、未満児のうち0才児保育については、この基準では不備であるが、これらの問題については、何れ別稿で検討することとした。

S女史の疑問に対して、ソーシャルワークのラインに多年従事してきたわたしとしては、ある程度問題を整理してミーティングの素材を出さないわけにはいかなかった。

今日印象深くわれわれの目に止ったいわば自由教育は、なにもここニュージランドに限らない。それは欧米それぞれの地域において、普遍的に見られる教育の在り方ではないか。むしろわれわれの側のスケジュールぎっしりの勤勉な方法の方が、マイナーなのだろう。

ある程度自由にやらせその児童の自主性のなかからいいものを引き出す方法は、子供たちの自主性自律性を信ずることが基本になれば、とても踏み切れるものではない。自主性を集団の自由の中から育てていくか、外からフレーム（枠）を与えて未熟な者たちの成長を助けるか、それはそれぞれの社会の成り立ちにもかゝる問題であろう。

長い歴史の道のりの間に、自我の発見・個人の尊重そして市民革命と、いわば社会に対する個の発芽・成長のカルチュアをもつ国ぐにと、封建体制から一挙に近代民主政への移行を果した場合との、社会と個との基底となるカルチュアが違うのではないか。

問題をひろげすぎるとがそのような感想を述べたとき、S女史からすぐの一つの指摘があった。

家庭教育・家庭のしつけ、それが深くかかわってくるのですよ。いまわたしたちの周辺によく見られるように、社会道徳を無視する大人たち、そして子供にも社会生活でのしつけをすることもなく放ったらかし、人に負けてはならぬ競争社会で手段をえらばず勝ち抜かなければ式の激励はあっても、空きカンをポイ捨ててはいけない、公共交通機関で行儀のわるいことをしてひとに迷惑をかけてはいけない、といった身近かな（社会生活へ適応するための）しつけを欠く実情では、個人といっても野放図に我ままに育てているか

ら、そこに問題があるのですよ。

この指摘は鋭く、適切だった。で、ミーティングは活発にいろんな問題が出されたのだが、いまはそれら魅力あるテーマから一応離れて、これらに触発されて、かねて問題視してきた社会のある断面について、小さな分析を試みることにしたい。

## 2. パターナリズム社会

何かを実現しようとしてある用語を使えば、やはり用語のもつ限界につきあたる。先ほどのカルチュアにしても、本能と対比して、生後学習されるものを総括している言葉の筈だが、カルチュアスクールばやりの世相の前に、この用語自体あいまいになってしまった。本能という表現も不明確なところがあるとして、動物行動学の分野でもその後、遺伝情報と遺伝外情報と言いかえる傾向がある。

“パターナリズム”にも、同じようなあいまいさがつきまとう。

試みに辞書<sup>(1)</sup>をひもとくと、次のように記されている。

Paternalismn. (政治・経済・雇用関係などで) (父の子に対するような) 善意に基づく配慮 [統制・干渉] ; 温情主義, 家族主義的経営 [統治]  
通常はこのような意味に限定されるが、ここでは少し一般化 (genelarization) して、過度の干渉・おせっかい・いらぬ世話の意味をもたせることにしたい。(他に一口で言いあらわせる適当なものがないため)

そうすると、われわれが馴れ親しんでいるこの社会は、パターナリズム社会と言えるのではないか、ということに思っていた。

それは日常生活の隅々にまで浸透しているので、普段あまり気にならない。ごく身近かところでは、公共交通機関のアナウンスもそうである。乗り換えなど必要な情報伝達は当然として、不要で丁寧すぎるお礼のことば、そして“傘などお忘れものないようと”マイクは冗舌にがなり立てる。旅する外国人の不審と失笑を買うこのパターナリズムなど、どっぷりその中に浸<sup>ひ</sup>っているわれわれは馴れっこになっていて聞き流すが、時には“余計なおせっかいを”と不快に感じ、そのいらだつ気分について車内に傘を忘れたという笑い話すら出てくる。

交通取締の状況も、自分の車を自分の判断で管理して事故を起さないように心がけるか、車検その他日常の交通取締を通じて不備な車が走らないよう

に目を光らせるか、両方のやり方がある。わが国の場合はもちろん行き届いた取締り指導の方で、一部外国の街角で見うけるバンパーやライトの不備なまゝ車を走らせている光景など、目にはしない。事故を起こさないよう車の管理を自分の責任とするのか、外からのパターンリズム的管理に委ねるか、の差異であろう。

日常の社会生活を離れて、社内研修の問題にもそれがあらわれる。

いまは研修ばやりの世の中、各企業会社とも初任者研修にはじまって、現任訓練 (training in service)、そして終末研修 (terminal training) と仮に名づけるものすらある。

それだけ盛んな割には、それらは研修を受ける側に充分吸収され効果を挙げているとは、必ずしも言いがたい。

歴史にのこる研修の効果的な例がある。

ケースワーク生みの母といわれるメリー・リッチモンド (MARY RICHMOND, 1861-1928) は、はじめからこの道に進んだ訳ではなかった。アメリカ東海岸の小都市バルチモアで、いろんな職業を経て、偶然にその地の慈善組織協会 (CHARITY ORGANIZATION SOCIETY…今日で言う社会福祉協議会的性格の団体) の会計係にトラバユを果したのだった。

採用内定から現実に職につくまで、10日間ほど期間があった。彼女はその間この新しい仕事の先輩たち (友愛訪問, friendly visiting) を探して訪れ、仕事の方法を学んだ。――

友愛訪問は、19世紀後半主としてアメリカのボランティア組織が実践していったもので、その根本は“友として” (as a friend) にあるとされる。現場 (line) に行けば、態度粗暴なひと、病気、怠けぐせ、アルコール依存症などさまざまなケースに直面する。そんなとき訪問者は相手 (client) を見下したり、軽べつしたり、説教したりするのではなく、あくまでも対等の友人 (as a friend) として接し、その間に彼もしくは彼女の社会的な立直りを計っていった。

この考え方が今日のケースワーク法 (social case work) の基本になっているのだが、メリー・リッチモンドは短い時間でそれを先輩達から吸収し、新しい職場で早速実践活動を試み、すぐにこの道の指導者となるに至った。

これは真剣な自己研修の目ざましい例であるが、その気になって本人が学ぶ場合と、単なる受け身の研修とはその差が大きい。

会社組織等のパターナリズム的研修も、効果に限界が出てくることが多い。先ほど挙げた仮称・終末研修など、その最たるものであろう。

あるときさる大手企業の研修担当者の依頼で出向いた研修が、それであった。会社停年直前の社員を集めたその会場では、目先きに迫った退職のその後に備えるため、貯蓄・健康・余暇利用・生き甲斐対策等々のテーマについて、それぞれの講師を招いて何回かのレクチュアを受けることになっていた。講師陣の1人として参加しながらわたしには、どうしても疑問をぬぐいきれないでいた。これは少々おせっかいの行きすぎではないか、このようなことは本人たちが考え自ら研究すべきことではないか。――

パターナリズムで与えられれるものは、必ずしも身につかない。さりとて野放しの状態では社会はカオスに近くなろう。このディレンマに向い合って、一つの方向が考えられると思う。よく知られている方法の一つ、グループワーク (social group work) の正しい運用と、その社会的応用である。

### 3. グループワークの効用

名前がよく知られている割には、それは十分消化認識されているとは限らない。その基本となるところを復習しておきたい。

社会福祉と社会教育の両分野に亘って活用されて、目ざましい効果をあげているグループワーク。

よく引用される代表的な定義を掲げておこう。

「ソーシャル・グループワークは、一つの方法であり、それによって社会事業団体内のグループに属する各人が、プログラム活動における彼らの相互作用を指導するワーカーによって助けられ、彼らの必要と、能力に応じて他の人々と結びつき、成長の機会をもつ経験を与えられ、もって個人・グループ・および地域社会の成長と発展をはからんとするものである<sup>(2)</sup>」

古典的定義を離れて、もっと実践的に大事な部分を抜き出してみると、以下に要約されよう。

#### (1) グループ・ワークの3要素

- ・メンバー
- ・グループワーカー (強力な指導者ではなく、手助けをするヘルパー的役割)
- ・なにかをする (そのためのプログラム、よく媒体とかミーディアムとか難しく表現されているが、要するにディスカッションでもレクリエーション

でも何でもよい、ということになる)。

## (2) グループワークの効果

10人前後の児童を対象に、グループワーカーの適切な誘導の下に、いろいろやっていると、個々の指導ではうまくいかないことが、グループの中で実現する。例えば、引っこみ思案の子が積極的に発言・参加するようになる、逆に出しゃばりの子が自然に全員と協調するようになる等々。

## (3) グループワークの目的

①孤独感→連帯感

②自主性と創造性

③他人を尊重する態度、技術、それを悦ぶ心

①と②はすぐに理解できよう。③が達成しにくい目標である。技術とあるのは、例えば相手と反対の意見を言う場合、いきなり対立的に発言するのではなく、そういう自分と違う考え方も前提如何によってはありうることを認めながら、やんわり反対の考え方を、しかし明確に出すことなどを指している。

何れの場合も、果すべきグループワーカーの役割が大きい。

それは社会福祉方法論に共通する一つのテーマ、非指示的(non-directive)に徹することであって、うっかりすると熱心のあまり、指示的(directive)になってしまう。directiveはパターナリズムに移行する。自分で心から納得しなければ、よく言われる次のような個と全の関係も身についたものにならないであろう。

“Every member of a living organism or social body has the dual attributes of ‘wholeness’ and ‘partness.’”<sup>(3)</sup> (活動している組織や社会団体の何れのメンバーも、全と個の二つの属性をもっている)

パターナリズム的なおしつけでなく、グループ内での、グループワーカーの適切な誘導によって、いろんな体験行動のうちに、自主的に個と全の矛盾しそうな属性を身につけることができる意味において、グループワークの目的・効用はもっと注目されていいと思う。

## 4. グループワークの社会的応用

この分野は未開拓で、これから創出してゆかねばならない部分を多く含む。筆者の主宰する研究会(グループワーク研究会、愛称アレフゼロ)も、その究極の目的はここにあるが、未だ緒についていない。

グループワークのすばらしさを、なにも10人前後の児童に限定することは  
ない。それは人数も無制限なら、年令も上限なく応用できる筈である。

具体例をあげて、問題点を出してみよう。

### (1) 会議の場合

仮に20人のメンバーがいて、中央に座長がいるとする。この場合座長はグ  
ループワーカーそのものである。

座長は発言の多い人をおさえ、遠慮がちなメンバーにやさしく水を向けて  
発言をうながさねばならない。またメンバーの中には、意見が違ふ場合感情  
的になる人がいるので、やんわりさとさねばならない。

non-directive といっても、グループワーカーの役割はかなり active で  
それに気迫が要るものである。

理想的にゆけば、意見のゴチャ煮でなく、異なる意見の友情的ぶつけ合い  
の中で、新しいものが生み出されることである。そしてメンバー間に親近感  
が生れ、相手を尊重する気持が生ずる。グループワーカーの活躍で、そこま  
でゆけば、目的を達する。

現実はその正反対のことが多い。座長は強いメンバーに傾き迎合し、その  
一方的発言を許し、控え目なメンバーを無視する。メンバー間には隙間風は  
生じて、連帯感を生じない。ギスギスした会議は、新しいものを生むこと  
なく空しく終る。

### (2) 大きい会議 — シンポジウムの場合

司会者がグループワーカーである。1,000人ほどの会議ともなればすべての  
メンバーの発言は時間的に無理だから、各方面の考え方を発言する多彩な  
顔ぶれを、4, 5人ほど、シンポジストとして壇上に上げておく方法は周知  
の通りである。

司会者はシンポジストに時間を限って、順次発言させる。次にシンポジ  
ストの発表内容がよくフロアのメンバーに理解されるよう、意見でなく質問を  
もとめる筈である。

その次が意見交換で、中心となるディスカッションの時間となる。シンポ  
ジストたちの出してくれた材料を考えながら、ともに練り、ともに議論して  
新しいものを創造しようとする。

司会者はやはり発言回数の多い人をおさえ、なるべく多くのメンバーから  
の意見をとめる。また感情的になりそうなメンバーをたしなめることは (1)

の場合と同じである。

実際は、グループワークの観点から見る限り、何処の場合も成功しているとは言えない。筆者の参加したある学会でもそうであった。フロアではまず質問と意見をとり違え、ついで意見といっても、シンポジストの提出した材料と無関係に勝手な発言をしてしまう。

気に入らないシンポジストの発言内容に人身攻撃的にかみつく。司会者はそれを放任している…。

### (3) レクリエーション

トランプなどの室内のあそびでも、ゲートボールのような野外的場合も同様である。グループワーカーに当る人がいて、要するに仲よくゲームをたのしめばよい。

現実はやはり正反対、勝ち負けに拘わり、時には悲劇的な結果になることすらある。すべてのレクリエーションについて、身近かなケースをふりかえてみると、残念ながら仲よくいっていないことが案外多いことに気づく。

その原因をグループワーカー1人におしつけるのは、もちろん公平でない。メンバー間に（児童世界以上に大人社会に）協調する気持が成長していないからではないか。

## 5. 道徳教育を垣間みる

福岡県教育委員会からの依頼で、「豊かな心を育てる道徳教育推進会議」委員を昭和62年度以降、筆者自身はミスキャストではないかといぶかりつつ、相つとめている。

オリエンテーションのようにして知らされた諸資料は、それ自身よい勉強になった。

その一つ、小学校における道徳教育の項目がある。全部で28項目。

健康・安全、礼儀・作法・時間の尊重、整理・整頓・物の使い方、自主・自律・自由と責任、明朗・快活・正直・誠実、正義・勇気、不とう・不屈、思慮・反省・節度・節制、自然愛護・動植物愛護、敬けん、個性の伸長、向上心、探求心、創造・進取、親切・同情、尊敬・感謝、信頼・友情、公平・公正、寛容、規則の尊重、権利と義務、勤労・協力、公德心、家庭愛、愛校心、愛国心、人類愛。

すばらしい内容だ。筆者はたじたじとなりながら、ひたすら感心する。



委員の中に現職教員の人もおられる。試みに質問してみる。

“友情を、例えばの話ですが、どのようにして学校教育の現場でとりあげるのですか？”

熱意と自信にあふれてその委員は、答えて下さる。“それはですね、相手がよろこぶことをしてあげても、それは友情にならないことなど具体例で説明するのです。例えば友達が間違っただけをしながら、それを指摘しよい方向に向かわせることが、一時的に相手の気持ちに沿わなくても、それが本当の友情というものなのでしょう。そのように説明すれば、子供たちは心から友情というものを理解できるのです。”

なるほど、なるほど。またしても筆者は感じ入りながら、自分の愚かさ故に、つまらない疑問を心中に抱いたのだった。

(理解することと、実践とは一致しないのでは？ 頭でなっとくしても、それを果して身についた行動として出せるだろうか？)

これはもちろんひとりよがりな疑問であって、当たっていないと思う。更についてに愚見を述べれば、28項目は一つのもの、愛に集約できるのではないか。完璧さをもとめて手をひろげれば、かえって実現しにくくなるのでは？

しかしその愛すら、世俗社会では生れにくいところがある。

## 6. むすびにならないむすび

押しつけのパターナリズムには限界がある。さりとて社会的カオスは望ましくない。

本稿では一つの道をグループワークの社会的応用にもとめてみた。しかしそれもつきつめるところ、人びとの愛の心如何に帰着するようだ。

悲観的な見方もある。

尊敬する同学の人・阿部志郎・横須賀キリスト教社会館館長は、述べている。

「人間は自己絶対化を免れない。…他者を愛しえない自己の現実を認めた上で、相手を受け入れる努力のうちに、ともに生きる相互性が新たにされるのだと思う<sup>(4)</sup>」(傍点は筆者)

これはギリギリの現実認識だと思われる。それは数々の聖句から見れば、かなりの距りがある。

“神を見たものは、まだ1人もいない。もしわたしたちが互に愛し合うなら、

神はわたしたちの中に在し、神の愛がわたしたちの中に完うされるのである”  
“愛さないものは、神を知らない。神は愛である”

問題は低い現実から、愛の最高基準へ向って努力するかどうかであろう。  
たしかに生身のわれわれは弱い。

“久遠劫よりいままで流転せる苦悩の旧里は捨てがたく、いまだ生れざる安養の浄土は恋しからずさふらふこそ、まことによくよく煩惱の興盛にさふらうにこそ”（歎異抄）

それほど弱い立場であっても、愛の戒律へ向って自身努力するとしないとでは、社会の中の仕事の面でも相異がすぐにあらわれる。

例えば北九州市の黒崎に立地する“聖ヨゼフの園”養護老人ホームの場合。シスターたちの気持が園全体に行きわたり、ここでは入居老人たちが自信とよろこびをもって生きている。いぢけたところが全くないのである。

このむすびの部分は前稿<sup>(6)</sup>の終りのところと連動している。

(註)

- (1) Kenkyusha's New English-Japanese Dictionary, 1980.11, 第5版.
- (2) H.トレッカー (永井三郎訳) 「ソーシャル・グループワーク」日本YMCA, 1967年, 3ページ.
- (3) Koestler, The Act of Creation
- (4) 阿部志郎, 新しく福祉を学ぶ人へ, 月刊福祉, '89年4月号.
- (5) 拙稿, 福祉社会を考える, 論集21号.
- (6) 拙著, 色難<sup>いろがたし</sup> — 生きている福祉, 相川書房, 1985年増改訂版, P.191~P.193

(附) 養護原理とパターナリズム

本稿で不用意に導入した感のある“パターナリズム”は、もともと保育科の専門課程学生へのレクチュアとして、養護原理をよりよく説明するためのものであった。

これは逆に、養護（施設・家庭）の在り方としての原理を説明することによって、パターナリズムそのものを多少とも補足説明することになると思われるので、つけ加えたい。

家庭養護であれ施設養護であれ、養護の基本はよく説かれているように、母親らしいスキンシップを伴った愛情——一口に言って、マザリングまたは同じことだがマターナル・ケア (mothering, maternal care) に盡きる。

そのマターナル・ケアを明確にするために、二つの両極端から限定してゆくと、考え方がよりはっきりすると思う。

一つは、虐待 (ill treatment) で、これは分りやすい。児童相談所の一時保護室には、その不幸なケースが現に存在する。虐待といっても、顔や体に残るケロイドのようにはっきり加害の程度が分るものと、ヒト社会においてサル社会にすら認められるインセスト・タブー (incest taboo) を侵す例のように、一見して分りにくいものがあるが、これらについては筆者の單著<sup>(6)</sup>で具体的に例示してある。

この明確な、マターナル・ケアと反する一方の極・虐待と、いまひとつ他の極を形成するものが、パターナリズムということになる。双方にはさまれて、その何れにも、とりわけパターナリズムの方に揺れないものが、あるべき姿としてのマターナル・ケアである。

そのパターナリズムの害は、児童の社会的自立を妨げる点であろう。自立といっても、身辺自立——A, D. Lの達成 (日常生活基本動作, fundamental Activities of Daily Life) ならば、困難なプロセスではあっても、分りやすい。社会的自立は表面かくれているだけに、深刻である。

具体例を挙げよう。

30代前半の男性。一見心身ともに健康そうに見える。安定した職業をもち結婚もしている。

彼の問題は、職場に出ると体調をくずし、(神経性)下痢を発症することだった。だから3日出ては休み、という状態をくり返しも早退職寸前の状況に追いこまれていた。

もとめられて面接する。体格が堂々としている割に声も細く、態度に自信がなさそうである。しかしはっきりとケースの実態がつかめたわけではない。

その後、本人の母親に会った。口八丁手八丁、いやものすごい（失礼）婦人であった。話しているうちに、筆者は思わず言ってしまう。「あゝお母さん、あなたが息子さんの原因者ですよ。その猛烈な過保護ぶり、それが幼児期から成人いや30代の現在まで一貫して続いている。息子さんを駄目にして、社会的に自立できないようにしてしまった。即刻干渉をやめていただきたい。そうでなければ症状は改善されませんよ」

母親は筆者の説明を、少しも理解しなかった。よかれと思っているから（パターナリズムの本質もそこにある）悪い筈はない、と信じきっている人に、その間違いを気付かせる能力を、筆者はもたなかった。

この不幸なケースは、これでジ・エンドである。彼はほどなく職を失った。その後のことは不明である。

これほど明確でなくても、潜在化しているパターナリズムの弊害というものがあつた。この方が分りにくく、対応もしにくい。表面は立派に社会的に自立している。時にはキチンとした成人として、または社会的声望すらある社会人として。

パターナリズムに浸された人格の欠陥は、日常生活ですぐにはあらわれない。平素とりわけ年長者や上司・先輩にノーマル以上に服従心が強く、頭が上らない心情すらもっている。（パターナリズムによる親権の強さの一般化）

それでいて、突然発症する。人が見ていないとき、ミエミエの盗み、すぐ分るウソなどに走ってしまう。頭かくして尻かくさずのたとえ通り、その犯行（！）は、幼稚ですらある。

有名銀行の支店長、優秀といわれていた医師の場合など、社会的にひろく問題をよんだ事件が、それらに該当する例となるようだが、学生のレア・ケースを含めて現存する人々のプライバシーもあって、詳述しかねる。

しかしよく気をつけて自分の周辺や社会での出来事を注意深く見ていると、パターナリズムの恐るべき発症例を発見することがある。

自主、自律を育てるマターナル・ケアは、もちろん望ましい。それを逸脱する場合の、虐待よりも本質的に重大なパターナリズムの弊害に、あらためて注目したい。